



■育ち、遊び、学びの連続性を見据えた木のおうち

私たちは「おうち」とは、いつでも帰れて立ち寄れる場だと考えます。在園児や卒園生、小学生にとっても、その「おうち」が心の拠り所となることが重要です。私たちは、小学校とこども園が一緒に敷地に建つこの敷地に、0歳から12歳までの育ち、遊び、学びの連続性を見据えながら、自然と触れ合い、五感を通じて「つながる・まざりあう・みとめあえる」心や感性を育くむ木の空間を設計し、いつでも子どもたちを迎え入れる場所としての園舎を提案します。

- ・「おうち」は、子どもたちの成長の中で心をつなぎ、感性を育む場。・木の香りに包まれ、深呼吸できる心地よい空気感。
 - ・園舎に設ける縁側は、小学生がランドセルを置いて遊び、のんびりとくつろぐ民家の縁側のような温かみのあるイメージ。
- この理念を具体的な空間に反映させ、子どもたちが安心して伸び伸びと成長できる場所を、皆さまと共に創り育ててまいります。

■五感を頼りに自分の居場所を見つけ、自然素材の持つ表情に囲まれ、お互いの違いをみとめあえる環境

子どもの育ちの中で心をつなぐ場を実現するために、子どもたちが直接触れる仕上げや遊具は、木材をはじめとした自然素材を採用します。床面・手すり・ベンチ等は素朴で温かみのある素材とし、園庭には小さな起伏や隠れ場を配して、子どもが五感を頼りに自分の居場所を見つけられる環境を整えます。さらに、自然素材の多様な表情や季節の変化が生む空間の移ろいを通じて、子ども同士が互いの違いを認め合う心を育むことを目指します。

【コンセプト2】遊びと生活が調和する保育環境

■子どもたちが長時間過ごしやすい空間の提案

子どもたちが長時間過ごす保育室は、雨の日でも遊ぶことのできる軒下空間（縁側）を介して、段階的に園庭とつながるようにします。半外部の縁側も、長時間を過ごす子どもたちの遊びと生活の場所となる豊かな空間になるよう計画します。

■保育室とホールとの関係性に対する提案

園の中心に遊戯ホールを配置し、その周囲に2～5歳児の保育室を配します。遊戯ホールは、音楽会や雨天時の遊び場、入園式など、用途や時間帯に応じて多彩に機能する多目的空間です。さらに、保育士の工夫により、友達同士や異年齢児の自然な交流を促す関係性を生み出す場とします。

■要求室の適切な配置計画

保育室を雁行に配置することで、各保育室同士が連続して繋がりが、互いがすぐ隣の部屋でありながらも、視線の抜けや縁側を介した異年齢児同士の交流が自然に生まれます。また、保育士同士の連携や交流も促進され、全体として協働とつながりを育む環境となります。

■保育室とプールとの適切な導線計画

プールへの動線は、子どもたちが各保育室から靴をはかずに直接行けるよう、保育室外部に設置したデッキを連結します。適切に目隠しを配置した上で、小学生がグラウンドからもアクセスできるよう配置し、プールの季節以外もランドスケープの一部として、車座になって腰掛けたりもできるデザインと機能を持たせます。

■保育士の働きやすさを最優先した配置計画

保育士の動線をコンパクトに計画し、声かけや連携が自然に行える配置を検討します。職員室からは園の出入口や各保育室の状況が見通せるように配置し、常時の見守りと迅速な対応を可能にします。休憩室や相談室は2階に設け、保育士が休憩時間に心身を回復できる落ち着いた環境を確保します。

■屋内外の遊びの導線計画、空間の提案

2～5歳児の保育室は、室内→縁側→園庭へと段階的につながる導線とします。登降園時は遊戯ホール側で靴を脱ぎますが、調理室横の廊下を通して園庭に出る運用を検討しています。1～2歳児には保育室の前に奥行き約3mの広い縁側を設け、多目的室①の西側には外広間も配置します。この半屋外空間は、雨天時や夏季の暑さでも利用できる遊び・活動の場として機能します。

■夏場に子どもたちが気兼ねなく遊べる空間の提案

園庭に面した樹木や、西側に設けた庇が、日差しを遮り涼しい日陰を形成します。深い軒下空間を活用した縁側も遊び場として利用し、複数の居場所を点在させることで、暑い夏場でも子どもたちが安心して遊べる環境を実現します。また、園庭には子どもたちのスケールに合わせた小さな屋根を配置し、遊びや休憩ができる居場所をつくります。

■適切な避難導線計画

各保育室から縁側を経由して園庭へ迅速に避難できるように設計します。遊戯ホールも乳児用園庭に面し、どの場所においても容易に屋外へ避難できる配置としています。また、不審者対策として、行き止まりのない空間構成とし、安全確保にも配慮しています。

【自由提案1】既存保育園の保育環境を継承

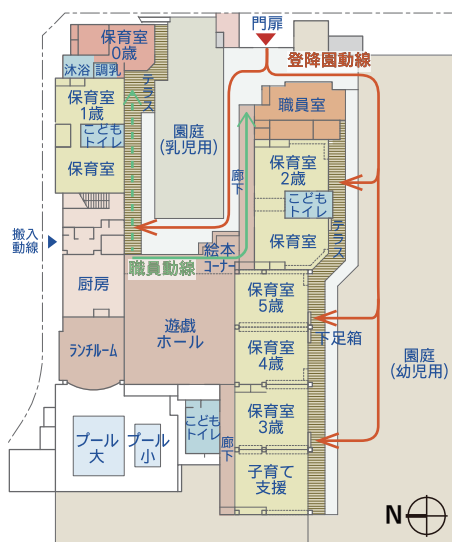
幼小連携による育ち・遊び・学びの連続性を支える上で、私たちが大切にしたい経験は次の三つです。第一に「本物に触れ、自分の身体と心で感じること」。第二に「五感を通じて感性を豊かにすること」。第三に「自分の手で未来をつくる実感を持つこと」です。既存の保育園の園舎には、これらの経験を支える空間要素や空気感が蓄積されています。本計画では、その目に見えない優れた要素を丁寧に継承し、新しい園舎に引き継いでいきます。



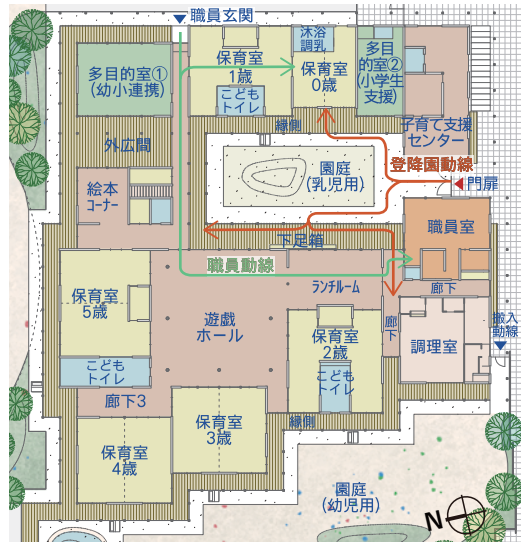
南ヶ丘保育園 幼児用園庭



南ヶ丘保育園 テラス



南ヶ丘保育園 1階平面図



南ヶ丘こども園 1階平面図





3 歳児保育室

■保育士の工夫を柔軟に実現できる田の字型保育室

保育士が子どもたちの成長や日々の活動に柔軟に対応できるよう、田の字型平面を基本配置とした保育室とし、間仕切りや幕を用いた可動式の設えにより、子どもの人数や活動内容に応じて空間を自由に分節できるようにします。私たちのこれまでの経験により、この田の字型の保育室は、保育士の工夫を柔軟に受け止め、子どもたちが主体的に過ごせる環境を実現します。

■子どもが選択できる空間づくりの提案

既存保育園の良い点を継承し、屋内・半屋外・大空間・小空間を併存させた設計とします。具体的には、半屋外の縁側や外広間、外広間に面した絵本コーナー、遊戯ホールとつながる廊下 2・3、園庭の小さな屋根など、多様な空間を配置し、子どもたちが自身の興味や気分に応じて自由に活動場所を選べる空間を、敷地内にちりばめます。これらの空間は、遊びや学びを促すとともに、安心して過ごせる居場所として機能します。

■将来対応を考慮した平面計画

主構造に木造を採用し、耐力壁の位置を将来的な多様な用途や人数の変動に対応できるように配慮します。また、今後こども園の利用人数が減少した場合には、5 歳児の保育室を小学生の活動スペースに転用できるなど、柔軟に対応できる平面計画とします。

■将来の設備機器や配管の更新のしやすさへの配慮

将来対応の設計として、配管、配線ルートを集約、適切な点検口の配置により設備更新を容易にします。可動間仕切り、余裕のある容量・管径、交換を前提とした設備配置などにより、ライフサイクルに応じた改修を低コストで実施できる設計とします。



園庭（乳児用）



弊チーム類似実績：木の柱・梁がある空間



弊チーム類似実績：縁側での活動



弊チーム類似実績：可動家具の設え

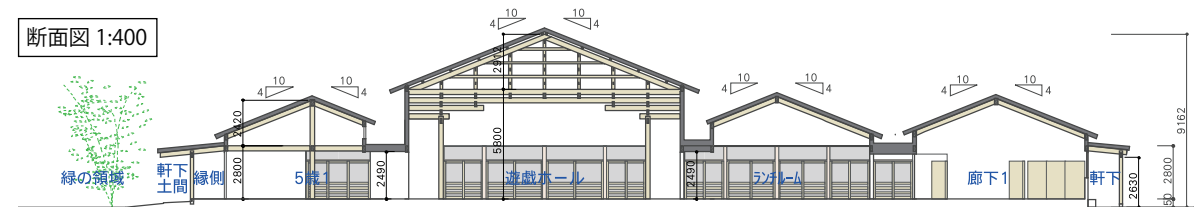


遊戯ホール

■木造空間がもたらす空間の魅力

あたたかみのある木造空間は、木の香りや手触り、木目など自然素材の特性を通じて子どもたちの五感を刺激し、身体の発育や感性の育成に寄与します。室内に木の柱が立つ構成は、たとえ大空間であっても子ども一人ひとりのお気に入りの居場所や拠りどころを自然に生み出します。既存の保育園が育んできた空気感や多様な空間使いを丁寧に継承することで、「つながる・まざりあう・みつめあえる 木のおうち」を実現します。

断面図 1:400



東大寺南大門の挿肘木

■燃え代設計による架構計画

上部架構は純木造軸組構法とします。構造材には京都府産材を用い、一部「燃え代設計」を行うことで力強い木造架構を現しとします。木造軸組は木材の通し方、仕口・継手のディテールによって架構全体の強度・変形性能・靱性が大きく左右されますが、連綿と継承された日本の木構造技術の長所を随所に活かした設計とすることで、高い耐震性・耐風性をもつ架構計画とします。

■古来より継承される木組みの空間

一边が 14.56m の大空間となる遊戯ホールは、東大寺南大門で大きな軒を支える「挿肘木」を応用し、千年を超え進化してきた伝統建築の特徴である「垂直・水平」の材料により大空間を力強く支える架構が見上げられる空間とします。

■合理的な基礎構造

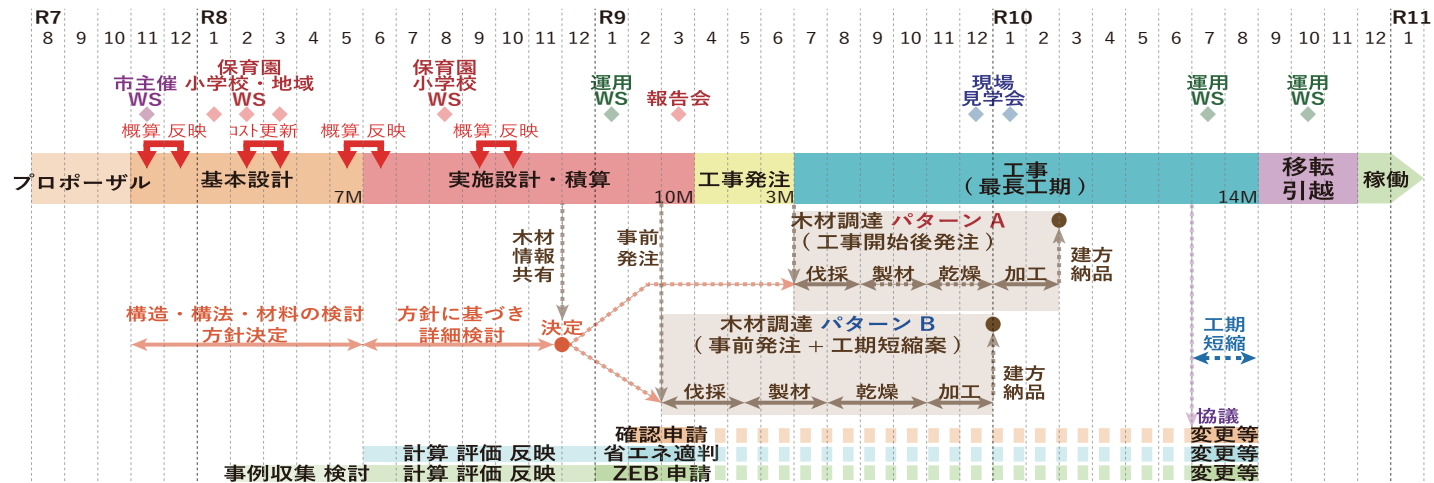
計画地にて実施する地盤調査結果を精査し、安全で合理的な基礎形式を選択し設計します。八幡市役所ハザードマップによると震度 6 弱の地震による液状化発生の可能性があり、地盤調査結果により適切な液状化対策を行います。

西立面図 1:400



弊チーム類似実績：木の架構を現した保育室

【コンセプト1】対話型の設計プロセス



■木材調達を踏まえた業務実施スケジュールとコスト管理の方針

基本設計段階では、木材や機器などの各種情報を早期に収集・共有し、実施設計において出戻りや修正を防ぐ丁寧な計画を策定します。木造とする場合、建築の規模から 200 m²を超える材積が想定されるため、全体工期内で最適な木材調達の事業スキームを構築し、発注方法や時期に応じた詳細な工程計画を立てます。今後の打ち合わせを重ねながら、（**パターン A**）や（**パターン B**）といった異なる方法を比較検討し、基本設計段階での詳細検討と概算の精度向上を図ります。これにより、12 ヶ月と想定される工期を遵守するとともに、適正な工事期間を見込んだ計画立案を実現します。

■保育士をはじめとする多様な関係者の適切なヒアリング時期の提案

可能な限り早い段階から、模型やパースを用いて、保育士や小学校教職員を対象に定期的なヒアリングを実施します。プランニングや、可変性の仕様と安全性、保育士が働きやすい動線・設備など、設計に反映すべき点について継続的に議論・調整します。これにより現場の運用性を重視した設計検証と合意形成を図ります。

■対話の円滑化方法（BIM 活用、模型等）の提案

ワークショップや協議では、模型や BIM での動画やウォークスルー機能を活用して直感的・視覚的に計画内容を示し、参加者間の意見交換を促進します。必要に応じて詳細模型まで作り込み、専門知識のない関係者でも設計意図や空間性を共有できる環境を整えます。併せて、関西に拠点を持つ設計事務所 JV の強みを活かし、関西地域の保育園設計事例を対象に視察を行います。保育士とともに現地を訪問して事例を検証し、その実務的知見を設計に反映することで、対話の円滑化を図ります。

■ヒアリング結果の建築計画への反映方針の提示

私たちは、保育士や教職員からのヒアリング結果を建築計画に反映させるだけでなく、その空間の日常的な使いこなしこそが重要であると考えています。こども園の子どもたちと小学生の相互交流の可能性、その際に必要となる安全性の確認について、保育士や教職員とともに継続的に検討し、細部にわたる設えまで丁寧に設計に反映します。

保護者や地域住民がこれまでそれぞれの場所で実施してきた菜園活動や地域イベントを、一つの場でどのように連携して展開できるかについても、行政職員の皆さまと共に知恵を絞り、計画に反映させていきます。こうした取組みを通じて、地域の協力を「まちの資源」と位置づけ、まち全体で子どもたちを育てていく機運の醸成を図ります。



幼児用園庭と縁側

【コンセプト5】ZEB化等の環境配慮 および 【コンセプト6】ライフサイクルコストを抑える工夫

■Nealy ZEB 認証取得にかかるスケジュールとコストコントロールの方法

左記スケジュールに従い、木造+外断熱工法を基盤に、建具の高気密化、Low-E 複層ガラス、外周に深い庇を設けるなどのパッシブ技術で年間熱負荷を低減し、冷暖房負荷の抑制を図ります。これに全熱交換器や高効率設備といったアクティブ技術を組み合わせ、一次エネルギー消費を大幅に削減する方針です。

実施設計段階では、詳細設計→省エネ計算→評価→設計修正→再計算の定量的解析ループを繰り返し、BEI を 0.45（一次エネルギー削減率 55%）まで最適化します。併行して経験豊富な積算事務所と連携し、基本設計時の概算から実施設計段階での増減を常時確認することで、確実なコストコントロールを徹底します。

■建物南面の勾配屋根面を生かした太陽光パネル設置による創エネルギーの導入

太陽光発電によって、全体の約 20%の一次エネルギー削減率を賄う計画とし、施設運営時にかかるライフサイクルコストの低減を図ります。本計画は、京都府再生可能エネルギー導入促進条例において、準特定建築物に該当するため、年間 3 万 MJ 以上の再生可能エネルギー設備導入義務は十分に充当する計画としています。

■高効率の設備機器導入について

空調の熱源や床暖房には、電気式ヒートポンプの採用を検討します。また、屋根形状に合わせて太陽光発電パネルを分散配置できるよう、太陽光発電、蓄電池、パワーコンディショナーを一体的に設置し、効率のかつ柔軟なエネルギー供給計画を策定します。

一次エネルギー削減率目標						
創エネ含まず			55%	創エネ含む		
	技術	設備	仕様	技術	設備	仕様
パッシブ	外皮断熱	外壁・屋根	フェノールフォーム保温板	アクティブ	照明	機器 LED 照明器具
		窓	Low-E 複層ガラス(空気層)		給湯	機器 高効率給湯器
		遮蔽・遮熱	軒・ピロティ			
アクティブ	空調	熱源	EHP/全熱交換器	効率化	再生エネルギー 太陽光発電	
		システム	熱交換・普通換気自動切替機能			
	換気	機器	インバーターファン			
				その他技術	新トップランナー変圧器/リチウムイオン蓄電池/ヒートポンプ床暖房	

■自然エネルギーを生かした快適な空間の提案

各保育室・遊戯ホールに北向きのハイスイドライトを設けることで、曇天時にも安定した自然光を取り入れ、既存保育園と同等の快適な保育環境を確保します。天井高のある保育室や遊戯ホールでは、太陽光発電を活用した電気式ヒートポンプを熱源とする床暖房に加え、家具裏からの吹出しと床下吸込みを組み合わせた居住域空調システムを導入します。これにより、室内の快適性を維持しつつ、省エネルギー性能の向上を図ります。

■建物の長寿命化を図るための設計手法を一体的に実施

木造中規模建物の長寿命化を図るため、①点検・維持管理の容易化、②十分な耐震性の確保、③深い軒を活かした外装材料の選定、④将来の可変性を組み込んだ設計手法を一体的に実施することを提案します。

まず維持管理面では、早期の劣化発見と対処が可能な設計とします。外壁の定期塗装が容易な仕上げとアクセス、ならびに水回りの継続点検がしやすい配管経路・点検口を確保することで、点検・保守作業を簡便化します。

構造面では、木造中規模の保育園設計の実績を持つ構造設計者と協働し、耐震性を十分に確保したバランスの取れた躯体設計を行います。

日本の多雨気候を踏まえ軒の深い形態とし、軒や雨水の流れを考慮した耐久性の高い外装材を採用します。これにより、外装の劣化を抑え、塗装などのメンテナンス周期を延ばします。

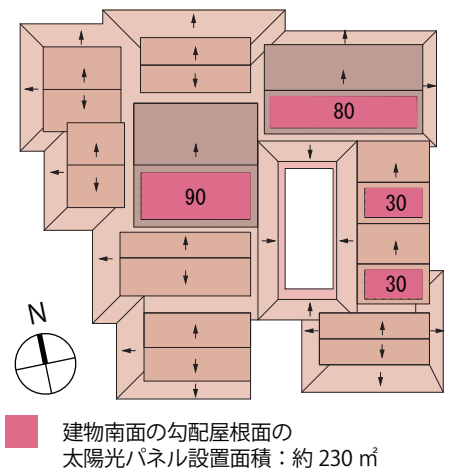
■木材利用と維持管理について

屋外に現しとなる木部は、深い軒の出による保護と併せて、使用を足場の不要な箇所絞るなど、維持管理に配慮した設計とします。

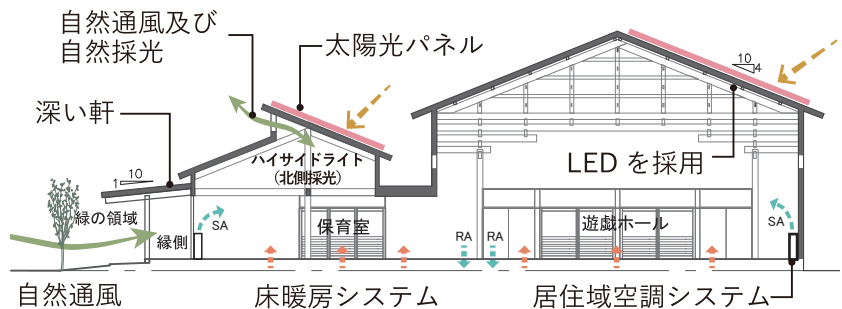
再塗装が可能な浸透性自然塗料を用います。その上で、経年変化の状況により、再塗装のタイミングについて提案します。



弊チーム類似実績：深い軒のある建物形状



建物南面の勾配屋根面の太陽光パネル設置面積：約 230 m²



【コンセプト6】設計段階からのコストマネジメント

■イニシャルコストの低減に対する提案

諸室を遊戯ホールを中心にコンパクトに配置し、延床面積を 1,608 m²に抑えることで、イニシャルコストの低減を図ります。子どもの保育環境を最優先とし、子ども用の主要スペースを1階に集約、2階を職員室等の大人用諸室に限定することで、1時間耐火ではない木造建築が実現可能です。建築基準法の要件に適合する「準耐火建築物（イ）」として対応しつつ、木材を現しとした温かみのある仕上げを採用できます。

木造による躯体の軽量化を踏まえ、基礎コンクリート量を削減する基本設計を進めます。並行して、燃え代を考慮した合理的な構造計算を早期段階から実施し、設計の各段階でコストマネジメントを徹底します。これらの取り組みにより、木造建築がイニシャルコストの低減となることを検証します。

	室名	面積		室名	面積
1階	保育室	494.71 m ²	2階	更衣室	8.55 m ²
	遊戯室（ホール）	218.20 m ²		休憩室	33.54 m ²
	職員室	65.34 m ²		相談室	12.42 m ²
	調理室・前室・休憩室	86.95 m ²		会議室	49.69 m ²
	ランチルーム	62.11 m ²		倉庫	9.82 m ²
	子育て支援センター	99.37 m ²		職員用トイレ・脱衣室・シャワー室・洗濯	6.87 m ²
	多目的室①・多目的室②	125.25 m ²		廊下4	23.83 m ²
	絵本コーナー	32.30 m ²		二階床面積 小計	144.72 m ²
	子ども用トイレ・調乳・沐浴室	76.07 m ²			
	職員用トイレ・バリアフリートイレ	8.70 m ²		床面積 合計	1,608.61 m ²
	倉庫	50.18 m ²		建築面積	2,122.70 m ²
	廊下	144.71 m ²		敷地面積	21,281.80 m ²
	一階床面積 小計	1,463.89 m ²			

■設計段階におけるコストマネジメント（設計概算算出等）のスケジュール提案

プロポーザル選定後には、積算事務所と協力し概略コスト算定マニュアルに従い全体工事価格算出を行います。

手順1 仕上げ数量の拾い出しと複合単価を算出します。

手順2 諸室 [m²] に各「複合単価」を掛けた額をまとめてその総額を「仕上工事費」として算出します。

手順3 「仕上工事費」を基準として、「建設物価 建築費指数 建物種類別ウエイト表」を参考にしつつ、「仮設工事費」「建設工事費」「設備工事費」を算定し、さらに割り戻しを進め「工事価格」までを導き出します。

手順4 こども園内の外構工事費・太陽光発電設備および通学路や小学校グラウンド改修工事費の算出については、メーカーからの実勢の材工単価をヒアリングし、その面積に応じて掛け合わせてコスト算出を行います。

■コスト配分表の定期的な更新方針

設計概算算出時の工事費バランスに基づきコスト配分表を作成し、基本設計期間中に定期的に更新します。第1回概算（令和8年2月）、第2回概算（令和8年5月）を実施し、構造体や各種設備ごとの配分を精査します。目標金額に近づけるため、VE や CD を行い、必要な設計修正案を提示します。令和8年6月までに概算額を取りまとめ、市の工事および設計監理予算確保に向けた成果物を提出します。

■乾燥処理や原木の確保に配慮した設計

断面寸法や長さを可能な限り統一することで、乾燥処理やブレカットの効率を高め、調達・加工・納品の工程を簡素化した構造設計を心がけます。

■木造躯体の概算算出

基本設計段階の構造図を基に、木材調達の概算を取得します。まず、京都府木材組合連合会・京都木材協同組合と連携する製材会社へ概算見積を依頼します。取得した見積をもとに、建物種類別ウエイト表を用いて建築工事費全体から躯体分を推定します。加えて、過去の中規模木造建築における躯体材工事比率等の実績データを参照し、概算の妥当性を検証します。全体工事費内に収まる材料量・仕様を確認し、木材調達の実現可能性とコスト影響を明確にします。

■実施設計におけるコストモニタリング手法

実施設計段階でも、常時コスト配分表を確認しながら設計を進めます。令和8年9月に設計共同体による相互デザインレビュー（DR）を実施し、設計内容とコストの整合性を確認します。材工分離発注を採用する場合は、少なくとも3社による見積り比較と単価調整を行い、予算内収束を図ります。また、確認申請の本申請時には、木材発注に必要な図面・設計書を先行して提出できる体制を整え、発注と施工準備の遅延を防止します。

【自由提案2】 通学路の魅力向上と安全確保

■育ち、遊び、学びの連続性を支える通学路の魅力向上

園舎の新設を契機に、子どもたちの育ち・遊び・学びの連続性を支える五感を育くむ環境を校内のみならず通学路にも拡げ、ることを提案します。

新しいこども園舎の西側では通学路を広く整備し、帰り道に友だちと気軽に語り合える屋根付きアルコーブやゆとりある余白スペースを設け、プロムナードとして整備します。さらに周辺環境と調和する色彩計画や植栽を取り入れることで、歩行そのものが豊かな感受性を育む魅力的な通学体験となるよう配慮します。

車道との境界にあるスチールフェンスは、防犯・安全性を確保するとともに、園の屋根や外壁デザインと調和させることで、南側から西門へ通う小学生が安心かつ楽しく通行できる通学路を実現します。

■工事費への計上を基本設計から実施

現時点の概算工事費では、躯体コストが比較的抑えられる木造を採用することで、本体工事費の中に余裕が生じる見込みです。この予算余力を活用し、「西側通学路改修工事」および「防球ネット改修工事」を計画に組み込んでいます。

既存の車道と歩道の境界にある老朽化したスチールフェンスを撤去・新設するとともに、防球ネットは既存ポールの一部新設、移設し、劣化したネットを張り替える工事を実施します。

■地域への説明を実施し意見を反映

これらの協議や予算計上は、基本設計段階から地域とのワークショップも含めて綿密に進めます。こうした合意形成と段階的な検討を通じて、周辺環境の景観向上と子どもたちの安全性向上の両立を目指します。



南西角のまちかど広場より、左に小学生通学路、右に地域に開かれた軒下空間と登降園出入口（エントランスピロティ）をみる



下校の風景1：屋根付きアルコーブ。友達と気軽に語り合える場所

下校の風景2：車道との境界フェンスをより安全性のあるものに新設

【自由提案3】BIM等を活用した合意形成

■設計段階でのBIMの活用

私たちはBIMに精通しており、3Dモデルによる建築構造や配管経路の可視化などを通じて、手戻りの少ない効率的な設計を実現しています。この知見を本計画においても積極的に適用し精度の高い設計を進めます。

■保育士との意思疎通にBIMを活用

BIMデータをもとに、LUMIONというソフトウェアを用いて3Dの動画を作成可能です。動画を活用することで、保育士や行政担当者に対して空間を直感的に把握していただき、より正確な認識のもとで合意形成を進められます。

■地域との合意形成にBIMを活用

地域の方々への説明や合意形成の場においても、動画は非常に有効です。実際に動画の中で人も動いている映像によって、よりリアルに利用者の感情やイメージを伝えることができ、共感を得やすくなります。

